

分析枠組みとしての自己「物語」とは

——困難な経験にアプローチするために——

東京学芸大学 水津嘉克

【1. 目的】

論者は、2011年から継続して自死遺族の語りから、遺族が直面するその困難性の内実、そして「語り」の場に参加することによってそのような困難を克服していくことが可能なのか否かに関して議論を重ねてきたが、これまで自己「物語」をどのように考えるのかに関しては、ある意味曖昧なまま・幅を持たせたかたちで議論してきた。しかし、一定の認識利得を求めて、困難な経験をめぐる語りの分析を進めていくためには、その際に用いる概念をめぐる理論的検討は避けられない。そこで、これまでの物語論をめぐる議論をふまえたうえで、分析枠組みとしての自己「物語」概念の精緻化を試みたい。

【2. 方法】

そもそも社会学において、物語論的な視点あるいはパラダイムが社会科学分野で注目されてすでに久しい。K. Plummerは既に1995年に「いま、はっきりと「ナラティブ」の時代が感じられる」(Plummer 1995=1998: 36)と述べている。プラマーは上記の著書において自らの理論的出自をシンボリック相互作用論のなかにおいているが(Plummer 1995=1998: v)、日本において物語論的アプローチ(Narrative Approach)が注目されたのは、浅野や野口によって家族療法やナラティブ・セラピーの考え方を社会的に「翻訳」する試みがなされたことと(浅野2000, 野口2002)、そして(そもそも社会問題論の領域で導入された)ソーシャル・コンストラクショニズムが翻訳書などを通して、より広い(見方によってはポストモダンの思想的潮流として)流れのなかで(再度)受け入れられたことによる影響が大きいのではないだろうか。

しかし、このような日本における物語論の受容のあり方は、その理論的背景を曖昧なものにしてしまい、実際に語りを分析する概念としてそれをを用いる際に様々な支障をきたしてしまった可能性もあるのではないかと論者は考える。そこで、本報告では自己「物語」という概念を、物語論として議論されてきたものだけでなく、現象学的社会学の分野で論じられてきた「生活世界」論と接合するかたちで、精緻化を試みる。

【3. 結果と結論】

物語的自己を生きるという実践は、ある種の躓き(それは人や場面によって様々に異なるが)が生じた時にわれわれに求められるものであり、分析概念としての自己「物語」は、自己物語を生きる/自己物語を語る、過程として結論づけられる。また他の『物語』と異なり、「自己物語を生きる」「自己物語を語る」という実践は、あくまでも語り手の住み込んでいる「生活世界」に依拠することによって成立するという観点から「生活世界」論との関係性を検討していくことにより、分析概念としての精緻化をはかる。

【参考文献】

浅野智彦 2001 『自己への物語論的接近 家族療法から社会学へ』 勁草書房。

江原 由美子 2000(1985) 『生活世界の社会学』, 勁草書房。

野口裕二 2002 『物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ』, 医学書院。

鈴木智之 2009 『村上春樹と物語の条件』, 青弓社。 等 他。